

# 老舎『月牙兒』試論

渡辺武秀\*

## On Lao shê (老舎)'s "Yüeh ya êrh"

Takehide WATANABE

### 概论

短篇小说《月牙兒》是老舎用第一人称写的悲剧故事。主人翁是“我”和“我”妈妈。故事是从“我”爸爸死的场面开始。爸爸死后，家里越来越穷，没有钱吃饭，第二个爸爸来了之后，生活好起来了，但他却失踪了。妈妈没有办法，当了暗娼。我心里恨妈妈，骂妈妈。但“我”的命运也跟妈妈一样。后来“我”也渐渐地坠入了当暗娼的活地狱。母女俩不当暗娼就不能活下去，太悲惨了。为什么会有这种事儿呢？在当时社会，女人地位很低，没有地方挣钱，所以一个没有男人而有孩子的女人不能正常地生活下去。

但作品里还有更重要的启示。仔细看故事的情节，我们会注意到，“我”的性格特别好。尽管“性格很好”，但为什么会有这样的结局呢？就是因为“性格很好”，所以才有这样的结局！这篇作品里有很多这样的描述。这是为什么呢？有什么意图呢？我以为，这些地方流露出来了作家对于“社会和人的关系”的一些根本看法：如果社会上有什么问题，或者社会的某个方面有问题，社会上最软弱的，地位较低的，尤其是其中“性格很好”的人就最敏感地反应它，最直接地，最强烈地受它的影响。“我”和“我”妈妈就是这样的人。

*Keywords*: tragedy, woman, prostitute

### はじめに

筆者は以前「老舎『微神』試論」<sup>(註1)</sup> という小論を書き、老舎の『微神』(1933) という作品と、今回取り上げる『月牙兒』との関係について少し述べたことがある。<sup>(註2)</sup>

「ユーモア」的なものが完全に払拭され「悲劇」そのものを中心に置いた作品ということになると、この『微神』以前には見あたらないように思われる。そしてこの作品の後に、例えば『月牙兒』(1935) 『駱駝祥子』(1936) のような幾つかの「悲劇作品」が連なっているように見えるのである。<sup>(註3)</sup>

この『微神』と『月牙兒』とにはすぐ挙げられる幾つかの共通点がある。例えば、一人称で描かれている。主人公が女性である。主人公の女性が私娼(売春婦でも公娼ではない)になる。物語の結末では主人公が一方は自殺し、一方は獄につながれるという極めて悲惨な状態になるといった部分である。

したがって、この二つの作品は様々な角度から、その関係について言及されることがある。例えば「売春婦」という点に視点を当てれば以下のような指摘になる。

『月牙兒』は『微神』の延長線上に並ぶ作品、強いて言えば『微神』の欠を補って、老舎の愛したひとりの女性の不幸を、同じような売春婦になった多くの女性たちの不幸にまで拡

平成12年10月13日受理

\* 総合教育センター・助教授

大して、もう一度追及しなおした作品ともいえるのではないか。<sup>(註4)</sup>

このような多くの共通点を持つ二つの作品のうち、一方の『微神』については既に考えたことがあるので、今回は、『月牙児』を取り上げ、検討を加えることにした。

この『月牙児』は老舎の短篇作品の中でも読者に特に好評を持って受け入れられているものの一つである。<sup>(註5)</sup> この小論では、老舎はこの作品でそもそも何を行っているのか、その何かを行うために作品をどのように作り上げているのかといったことを論じてみたい。そして、『微神』と『月牙児』との関係のさらなる解明につなげたい。

## —

まず、老舎はこの『月牙児』でどのような試みをしているのかであるが、これを考える手がかりとして、例えば、以下の文章から見てみよう。これらの文章は『月牙児』の結末に近いところに位置する。

時には客の皮の財布を盗んだし、時には人の帽子、或いは幾らか値打ちのある、手袋やスッテッキを残してそのまま置いていた。<sup>(註6)</sup>

時には、客が酔っぱらったら、その客を担ぎ出し、人気のない場所を探して座らせ、靴さえも持って帰ってきた。<sup>(註7)</sup>

この種の行為は、卑劣で、恥ずべきものであり、まともな人間がやるべきことではない、といえるだろう。確かにこの行為は普通であればこのように見るのが当然である。だがしかしもう一つの違った方向から、或いは違った基準を通してこの行為を見た場合に、もしかしたらこの人物の、この行為ならば許されるということはあり得ないないだろうか。この行為が正しい

ものだとまでは言えないにしろ、やむを得ない、或いは仕方がないとするはありえないか。

なぜこのようなことを言うのかというと、この作品を読み、作品世界の中に引き込まれている読者であれば、物語の、この場面に至り、この人物の、この行為を、簡単に卑劣なもの、恥ずべきものと言い切ることはできない気持ちになっていると思うからである。こうなるのは、作者が読者をこのような気持ちになるように仕組んだからである。

こう考えれば、作者がこの作品で行おうとしていることがいくらか明らかになってくる。作者は読者を少なくとも「この人物の、この行為はすでに卑劣なもの、恥ずべきものではない」と判断する段階に連れて行こうとしているのであるといえる。そしてそこで行われる判断がもし「普通」でなければ、それは作者が「普通」でない価値基準を持つ世界を作り上げているというふうにも言える。

さらにこの場面で、作者が、この行為に対して、この女性に発言させている部分を見てみよう。

「やれることは何だってやる。私たちは十年を一年として生きているんだよ。七十や八十になって私たちを欲しいって言う人がいるかい？」<sup>(註8)</sup>

この女性にとっての一年は普通の人の十年に相当する。この女性はそんなふうな差し迫った辛い生き方をしていると取れる。だから、その女性はやれることだったら何でもやる、というのである。

この言葉の発言者は女性で、現在この女性の娘は私娼をして生活し、娘がこの女性の面倒を見ている。これはその人物が娘の処に来た客のものを盗んだりする行為を正当化するために発言した部分である。

この女性もかつて私娼をしていた。だが現在は、すでに年を取り、自分はその商売ができな

くなっている。だから今度は自分の娘が身体を売り、そのお金で自分も生活しているのである。こんなふうであるから、この女性はこのような生き方をしている人間の将来がどのようなものであるか骨の髄まで知り尽くしていると考えられる。こういう女性によって発言されている主張である。

この作品の成否のポイントは、この女性の言葉に説得され、読者がそれに納得するかどうかであると思われる。もし読者が反発せずに説得されるならば、作者のこの作品での試みは成功していると考えてよい。

もちろん、単に、この場面の彼女の行為を見ただけでは、もしかしたら読者は女性の言葉が自分勝手な主張であると受け取るかもしれない。恐らくそのように受け取ることは充分あり得る。実はここなのである。前後なしで単にこの場面のみで受け取る印象と、作品の冒頭からストーリーの展開に沿ってここまで来たときの受け取り方の違い。ここに、この作品の存在する意味がある。

確かにこの場面だけ見たときには女性の言葉が自分勝手な主張に見える。だが、読者は、ストーリーの展開の流れに身を任せ、ここまでたどり着いた時には、女性の言葉が何の躊躇いもなく受け入れられるようになっていく。作者がこの作品でやろうとしていることは、まさにこれなのである。

そして、もしこの場面の、この女性の言葉が読者に受け入れられたのであれば、作者が、この場面に至るまで少しずつ女性の言葉を「やむをえないもの」或いは「当然のこと」と受け取るように、登場人物を通じて読者を説得し、最終的にそれがうまくいったということなのである。

だが、そこには、まだ、本当に、間違いなく読者が女性の言葉を「やむをえないもの」或いは「当然のこと」と受け取ったのかどうかという疑問は残されたままである。その疑問を払拭するには、その時点で読者がそのような気持ち

になっていることを確かめなければならない。だが確かめるとは言っても、読者の気持ちを実際に眼で見ることはできない。

ではどうするか。これを明らかにするには、やはり作品での作者の説得の仕方を詳細に調べることしかないように思う。具体的には作品の構造或いは作品の展開を検討することである。このような作品構造、展開であれば、必ずや読者はこの人物に引きつけられ、最後にはその人物の、卑劣で、恥ずべき行為と思えるものさえも許してしまうということを確認しなければならないのである。

## 二

作品分析に入る前に、作品全体について少し述べておきたい。

この作品は全部で「節」は四十三に分けられている。しかし各「節」の文字の分量は非常に少ない。最も分量の少ない「節」は「六」で四行から成っている。その他にも五行の分量で作ってあるものもある。「一」「二十四」「四十一」がそれである。最も分量の多いのは「四」と「二十八」であるが、それでも二十八行しかない。「節」の数からすれば長篇小説だが、全体の文字量からすれば短篇小説の部類に入る。また、文章で段落を一切使っていないということも一つの特徴といえるだろう。<sup>(注9)</sup>

これらの特徴から、この小説は、まるで長篇小説のあらすじを書いたもの、という印象を与える。

外形はこのような不思議な体裁を持つ作品である。<sup>(注10)</sup>

こうであるから、物語も当然外形の影響を受け、まるであらすじのように展開していくことになる。また一方では、『月牙児』（三日月）の印象的な効果も巧みに取り入れられているので、どちらかというとも朦朧とした詩的な雰囲気を持っているといえるだろう。

作品内容は親子二代にわたり私娼をして生き

る母娘の物語である。主な登場人物は「私」という一人称で登場する女性の主人公と、その主人公の母親の二人である。

したがって、この物語は「私」という一人称の視点から語られことになり、その際「私」という言い方は表面的には作者＝「私」という印象を与えるので、自伝的な雰囲気も出てくる。<sup>(註11)</sup>

物語は内容から大きく次の三つの部分に分けることができると思われる。

- (1) 母親の物語
- (2) 「私」の物語
- (3) 母親と「私」の物語

これらのそれぞれの物語を、これから検討して行く。

### 三

まず「母親の物語」であるが、この物語が作品全体の中でどのような役割を果しているのか、どのような効果を生み出しているのかを考えてみたい。

物語は、「私」が七歳の時の、父親の死の場面から始まる。父親が亡くなり、母娘二人の生活が始まる。収入の道はなく、ついには質に入れる物もなくなる。やがて母親は人に洗濯をしてやることで生計を立てようとする。仕事は過酷で、手がひどく荒れ、激しく汚れて固くなった靴下の強烈な臭いで、食事も取れずしだいに瘦せていく。

そのうちに新しいお父さんがやってくる。そのお父さんは優しく、小学校にまで通わせていく。こうして数年、幸せな生活が営まれる。だが、ある日突然父親が失踪する。また質屋通い、また母親の洗濯で生活をしていくと思っていたが、不思議なことに相変わらず母親は綺麗に着飾っている。実は母親は私娼をすることでお金を稼ぎ始めたのである。しかし、この商売にも限界がある。「もうすぐ老いてしまう。あと二年もしたら、ただであげようたって貰って

れる人はなくなる。』<sup>(註12)</sup> 母親は饅頭屋<sup>マントウ</sup>の主人に嫁いでいった。「私」は母親にはついて行かず、小学校の太った女校長の好意で学校に住まわせてもらうことになる。こうして母と娘は離ればなれになる。「母親の物語」はここまでである。ストーリーはこのように展開して行くのであるが、このストーリーを観察すると、この「母親の物語」には一つのパターンが二回繰り返されていることが分かる。それは、一家の柱となるべき「父親」という存在が消失してしまうというものである。そして「父親」がいなくなった途端に、家にお金が無くなり、ご飯も食べられないような貧乏な状態に陥るとい現象が続く。そして第二番目の父親の失跡の後に、ついに、母親は私娼を始めることになる。最後には、私娼で稼ぐこともできなくなることを予感し饅頭屋<sup>マントウ</sup>の主人に嫁いで行く。これも決して裕福な生活を期待できるものでなく、最低限の食事と住むところが保証されるほとんど身売りのようなものである。

もちろん「私」の母親は特別な人物ではなく、ごく普通の美しい女性である。決して怠け者だとか、彼女の性格に何らかの問題があるということもない。もちろん何等悪い行為をしてもいない。

では、どうしてこのようになってしまうのか。

「私」の母親はもちろん食事を作ったり、洗濯をしたりすることは十分にできる。だが、母親のような女性は、この社会では自立して働くことのできるような訓練も受けてないし、また何よりも女性に働く場所が準備されていない。つまり、そうなるのは、この作品の背景になっている社会が男性中心の社会であり、夫がいなくて、しかも子供を抱え、女性が一人で一家を支えることは非常に難しいからである。

だから、当然ながらどの女性も自分の夫が亡くなることになれば、それでもう普通に暮らして行くことはできなくなってしまうのである。この物語は「私」の母親のみならず、ごく普通の女性がこのような運命に陥る可能性があるこ

とをも同時に暗示している。

このことは、もちろん母親の娘である「私」の将来にも影を落とすことになる。「私」も女性であり、このような男性中心の社会の中で生きているのだから、もしかしたら母親と同じ運命をたどるかもしれないのである。

だが、「母親の物語」の存在が果たす役割はこれのみではない。作品全体から考えたとき、もう一つ注意すべき点がある。

#### 四

「母親の物語」に、「私」が、母親が私娼をしてお金を稼ぐ行為をひどく恥ずかしがり、激しく憎むという部分があることに注目したい。というのは、この作品における「悲劇」性は、この、「私」の感情によってさらに強められているように見えるからである。

まず、「私」が、自分の母親が私娼をしているのではないかと気づく場面を見てみよう。

しばしば、私が学校から帰って来ると、彼女がドアのところ立っているのが見えた。それから暫くして、私が道を歩いている時、ある人が私に「おい！」と声を掛けた。「おい！、この手紙をおまえのお母さんに渡してくれないか！」「おい！お前は売らないのかい？お嬢ちゃん！」私の顔は火が出るように赤くなり、顔をそれ以上下げられないくらいに下げた。<sup>(註13)</sup>

母親の私娼という行為に対する「私」の恥ずかしさの表現である。さらに、「私」は母親に憎しみ、軽蔑のような感情をも持つことになる。

疑いの心が起きたとき、私は母を罵らないわけにはいかなかった。さらにちょっと考えてみて、私は母を抱きしめ、もう二度とそんなことをしないようにと忠告しようとした。私は母を助けることのできない自分が恨めし

かった。<sup>(註14)</sup>

では、この種の感情はどこから生まれてくるのか。それは、しばしば以下のような形で人々の頭の中に定着するものようである。

私はクラスメートに聞いたことがある。ある者は、去年卒業した者のうち数人はお婆さんになったと私に告げた。ある者は、誰かが私娼になったと告げた。その時、私はこれらのことが余り理解できなかったが、彼らの言い方から、これが良いことではないと推測できた。<sup>(註15)</sup>

この部分から、この作品の背景になっている社会では、やはり女性が妾になったり、私娼をしたりすることは卑しむべきもの、恥ずべきものであると見なされていることが分かる。「私」はこの影響下にいるのである。

では、この「私」の、母親が私娼をしてお金を稼ぐことに対する恥ずかしさ、憎しみという感情が、どのように作品の「悲劇」と関係しているのだろうか。

この作品は、母親も、その娘の「私」も両方とも私娼になるという衝撃的な筋立てになっている。

この筋立てと、「母親の物語」で作りに上げられた母親の商売が「恥ずかしいもの汚らわしいもの」であるというイメージとが絡んでいるのである。

この作品がこのような組み立てであるから、今度は、あれほど恥じ、軽蔑した母親のあの行為を今度は「私」が行うということになるのである。だとすればその時、以前「私」が母親のそれを恥じ、軽蔑すべきものとしただけ、今度は、「私」のその感情が、母親と同じことをする「私」にも、そっくりそのまま降りかかってくることになる。

そして、それが「恥ずかしいもの汚らわしいもの」であればあるほど、そこに墜ちて行く際

の恐怖もまた大きくなるだろう。また、それがひどく恐ろしいものであればあるほど、「私」は母親が行ったようなことをする境遇に墜ちて行きたくないし、読者も「私」を行かせたくないと思うだろう。ここにおいて、作品の展開は手に汗握るものになる。

決して「私」がそうなるかと積極的に選んだものではない。「私」の個人の力ではどうしようもないものに引っ張られて私娼に墜ちて行くのである。もちろん「私」はそれ以外のことをしようと一生懸命に努力はしてみた。しかし何ひとつうまくいかなかった。結局食べるため、生きるためには、それをするしか方法がなくなっていく。だから「悲劇」なのである。

このように考えると、後の物語の展開と、「母親の物語」で作りに上げられる母親の商売に対するイメージがどのように絡み合っているのか、いくらかははっきりするのではないか。

## 五

次に『「私」の物語』を検討して行く。

ここでは幾つかの場面を取り上げて、どのように「私」が私娼をせざるを得なくなっていくのかといったような展開を見ていきたい。

### (1) 〈小学校から出て行く〉

饅頭屋の主人に嫁いでいった母親と別れ、「私」は小学校の女校長先生の取り計らいで、学校で寝場所、食事を与えられ生活をするようになる。さらに卒業してからも小使さん夫婦と一緒にその小学校に住み続ける。時々学生たちの手伝いをしてやったりして、少しばかりの金を稼いだりする。

だが、この生活は女校長の配置転換によって終わりを迎える。中国では「長」となる人が辞めれば、学校から出て行かざるを得ないのである。<sup>(註16)</sup> だが、この際、この学校に残れる可能性が全くないこともなかった。

もし「私」が面の皮を厚くして出て行かなかったら、新しい校長だってむげに「私」を追い出すなんてことはしないだろう？ でも「私」は人が外に押し出すのを待っていることはできない。<sup>(註17)</sup>

新しい校長だって、そのまま頑張っただけ居座っていたら、そのまま置いていてくれるかも知れない。しかし、「私」はこのような道を選ばなかった。自分から出て行く道を選択するのである。

この選択には「私」の性格の幾つかを見出すことができる。それは厚かましくすることができないとか、相手の慈悲を期待することをしないというものであり、寧ろ「好ましい」性格ということもできよう。しかし、自ら学校を出て行くという選択をすることで、以後の生活に大きな困難が出現することが予想される。

### (2) 〈優しい男性との出会い、そして別れ〉

小学校を出て行けば誰も援助はしてくれない。たちどころに食べるもの住む場所もなくなる。これを確保するには、働く場所を見つけなければならぬ。だが、仕事は探すとなるとなかなか見つからない。困って、小学校で世話になった女校長のところに相談に行く。ところがその日は、女校長は不在で、校長の親戚であろう一人の青年が応対した。彼に来意を告げると、彼は援助を約束した上に、叔母が渡して欲しいと言っていたとしてお金までくれた。さらに、次の日、新しい部屋を用意し、そこに引っ越しをさせてくれたのである。

この優しい青年の魅力に引かれ、やがて結ばれる。彼の庇護による生活が始まった。彼は、食べるためのお金、何枚かの洋服を「私」に与える。もちろん「私」はこんな生活を望んでいるわけではない。しかし、彼に頼んで仕事を探してもらってはいるがどうしても見つからないので、仕方なくこのような生活が続けるしかないのである。

だが、このような生活も一人の女性の出現に

よって終止符が打たれることになる。

私の春の夢は終わりを迎えた。ある日、ちょうど正午になったばかりの頃、一人の若い婦人がやってきた。彼女はとても美しかった。でも精巧な美しさではなかった。磁器人形のようなだった。彼女は部屋に入ってくるなり泣き始めた。問うまでもなく、私の方はすでに分かっていた。彼女の様子では、彼女は「私」と喧嘩をする気持ちはないし、私はもっと彼女と衝突するつもりはなかった。彼女は正直な人だった。彼女は泣き、だが私の手を取り「彼は私たち二人を騙しているのよ！」と言った。私は彼女も「愛人」であるだけだと考えていた。そうではなかった。彼女は彼の妻だったのだ。彼女は私を責めず、ただ何度となく「彼を放してくださいませんか！」と言うだけだった。私はどうして良いか分からなかったが、この婦人が可愛そうになった。私は承知した。彼女は笑った。彼女のその様子を見て、私は彼女がぼんやりしていると思った。彼女は何も分かっているはず、ただ単に夫が必要だということを知っているだけだった。<sup>(註18)</sup>

「私」はその女性の願いを即座に受け入れる。そして次の日、青年には何も告げず、ほとんど何も持たず、部屋を出て行く。これが、この場面での「私」の選択である。

もし「私」が男性と別れることを承知せず、またはこの女性を欺こうと思えば、恐らく容易にこの女性を欺くことができたかもしれない。だが、「私」はそうしなかった。

何がこのような選択をさせたのか。「私」は彼女に「可愛そう」という気持ちを抱いている。この心根が「私」に決心させたのである。これは「優しさ」と言えるだろう。「私」自身は職業もなく、お金もない。そんな状態であるにもかかわらず、彼女に同情して、部屋を出たのである。この「優しさ」はまさに無上の「優しさ」と言えるものだろう。

こう考えると、この選択は、恐らく読者も「私」にそうすることを期待し、「私」もそのようにしたのだから、読者にとっては極めて喜ばしいものであろう。だが、その「私」の「好ましい」選択は皮肉なことに必ずしも最善の結果を生み出さないばかりか、却って悲惨な生活を強いることになるのである。

### (3) 〈飲食店に務め、そして辞める〉

いろいろ働き口を探すが容易には見つからない。ある飲食店で店員を募集していることを知る。応募して面接試験を受けた結果、店主はたくさんのお応募者の中から「私」を選ぶ。それは「私」が綺麗な女性であることの証明でもある。

以下の引用は、その選抜に受かることが如何に難しく、またここで働けるということが、他の女性にとって羨ましいものであったのかを示すものである。<sup>(註19)</sup>

私は一列の若い娘たちと一緒に小さな飲食店で選抜試験を受けた。……その女の子たちは私をととても羨ましがっているようだった。あるものは驚いたことに涙を浮かべて帰って行ったし、あるものは「こんちくしょう」と罵った。女性というものは何と値打ちのないものだろうか！<sup>(註20)</sup>

やっと入った、その飲食店での仕事は酌婦（「女招待」）をすることだった。この飲食店にはもう一人酌婦がいる。「私」が「第2号」酌婦で、以前から居る女性が「第1号」酌婦だった。この「第1号」の服装や仕事ぶりは以下のようなものである。これによって、「私」に期待されている仕事内容がわかる。

不思議だ！「第1号」の袖はとっても高く巻き上げられていた。袖の白い裏生地は一点の汚れもなかった。腕には白絹のハンカチが置かれており、そのハンカチには「妹の私は貴方が好き」と刺繍されていた。彼女は朝か

ら晩まで顔に白粉をたたき、唇には血の瓢箪のように口紅を塗っていた。客に煙草の火をつけてやる時、彼女の膝はお客の足に寄りかかり、そうしてお酌をした。ある時には、彼女自身も飲んだ。お客に対し、ある時は、彼女は非常に周到に仕えた。ある時には、見向きもしなかった。瞼を下げ、見えない振りをすることがあった。<sup>(註21)</sup>

時には艶めかしい態度で客に接し、時には故意に冷たくする態度を取ってみたりして客を惑わす。「第1号」はこのように仕事をしている。

「私」は「第1号」のようなことをすることができないのである。店主は「ここで長く働こうと思うなら、『第1号』のやるようにやれ」<sup>(註22)</sup>と警告する。だが、「私」にはそれができなかった。もちろん「第1号」がそのようにやる事情も分かっているし、決して「第1号」を軽蔑しているわけではない。ただ「私」は「第1号」のようにしてお金を稼ぎたくないのである。普通の給事として働きたいのである。しかし、それが許されないのだ。

どうしてもやろうとしない「私」を見て、店主は最後通牒を発する。数日の猶予を与え、もしそれをやらなければクビにすると迫る。しかし、誰にどのように言われても、最後まで「私」は「第1号」のようにやることを拒み、結局自分から辞めた。

この結果、「私」が最も恐れている状態が最後に「私」の処に忍び寄ってくることになる。

最後の黒い影が私の方に向かって一歩近づいた。それを避けようとして、さらにそれに歩み寄った。私はその仕事を捨てたことを後悔はしなかった。だが、私はその影も本当に怖かった。<sup>(註23)</sup>

この選択をどのように理解すればよいのか。

もしかしたら、「私」という登場人物の選択は余りにも大人げない、そのような仕事でも職業

であると割り切って、「第1号」と同じようにするべきであるという考え方があるかもしれない。このようにすればもしかしたら悲惨は免れたかもしれない。しかし「私」は敢えてそれをやらなかったのである。

## 六

『私』の物語」に於ける、それぞれの場面の展開に共通して見られる特徴を取り上げると以下のようなになるだろう。

- (1) 登場人物は「好ましい」性格の持ち主である。その性格は、すでに、各場面で見たとおり、時には人の慈悲を受けることを潔しとしないものであったり、時には人に対する優しさであったり、時にはきっぱりとした気骨ある態度であったり、時には女性のプライドを保つことであったりする。
- (2) どのようにするかという局面では、登場人物が進むべき方向を自らの判断で自ら選択している。この方向はすべて、そうすることを読者（誰も）が期待するであろうところのものであり、また歓迎するところのものである。この点で「好ましい」選択であるといえる。
- (3) 登場人物が「好ましい」選択をすればするほど、登場人物はしだいに困難な境遇に墜ちて行くことになる。

作者は明らかにこの展開のパターンを意図的に使っている。

では何のためにこのようなパターンを使ったのか。それは、読者の、ある感情を引き出すためではないかと考えられる。

「好ましき」の発揮は「私」に必ずしも幸せをもたらさない。そればかりか、却って悲惨な状況を招くことになる。この際の読者の心理は極めて複雑なものであろうと思われる。「私」という人物が「好ましい」性格であり、その悲惨な状況が「好ましい」ことを行なった結果だけに、彼女のその境遇に対し激しく「同情」することに



なるのではないか。

そして、この展開のパターンは、場面を変えながら繰り返されることになる。そうすれば、そのたびに読者の感情も繰り返し揺さぶられ、読者はそのたびに「好ましさ」に打たれ、ますます好意を持つに至る。そして、その結果、「同情」の気持ちもだんだん強まって行くように思われる。

つまり、作者は、この展開によって読者の、「私」という登場人物に対する強い「同情」の気持ちを引き出そうとしていると考えられるのである。この「同情」は、彼女をそのようにしているものに対する「憤り」と表裏をなしている。

そして、この「同情」こそが、この作品の存在の意味に大きく関わっているのである。

## 七

最後は「母親と『私』の物語」である。

ここでは、この「私」がある時期から「悪い」ことをし始めることに注目したい。

私はまもなく死ぬだろうと信じていた。しかし死ななかった。ドアの外でノックをするものがいた。私を訪ねてきたのだ。よろしい。その人物に仕え、病気を力の限りうつしてあげた。私はこのことが人に申し訳ないことだとは思わなかった。このことはもともと私の過ちではないのだ。<sup>(註24)</sup>

「私」は病気に罹ってしまう。このような状態の「私」のところにお客が来、そのお客に病気をうつしたのだ。これが最初に現れる「悪い」ことである。

「私」は病気になることもあり、母親に会いたいと思いはじめ。そこでかつて母親が嫁いでいった饅頭屋を訪ねる。しかしそこにはすでに饅頭屋はなく、母親も居なかった。尋ね歩くが見つからず、あきらめて帰ったところ、暫くして母親が自ら「私」の処に現れたのである。こ

うして母親と「私」の生活が始まる。

作品の作り方、ストーリーの流れから考えると、母親の姿は「私」の将来のそれであり、母親が現在行うことは、「私」が将来必ず行うであろうことを予感させる。したがって、母親が現在行っている「悪い」行為は、将来娘も行う可能性を充分含んでいることになる。

母親は、特にお金に、執念を見せる。

彼女の目はすでに若い頃の光沢を失っていた。しかしお金が目に入ると、まだ光を放つことができた。お客に対しては、彼女は自ら召使いに任じていた。だが、お客が渡すお金が少ない時には、大きな口を開けて罵った。<sup>(註25)</sup>

そして、お金のためには、ほとんど犯罪に近いことをする。この小論の「一」に挙げた引用文は、まさにこの脈絡の中で出現するものなのである。

「私」自身も二、三年この商売をして変わってしまう。

二、三年商売をして、自分が変わってしまったと感じた。私の皮膚は荒れ、私の唇はいつもカサカサしており、私の目はいつも濁って血の筋が走っていた。私は起きるのがとても遅かったが、それでもすっきりしなかった。私がこのことを感じ始めると、客も盲目ではない、馴染みの客はどんどん減っていった。新しい客に、私は一生懸命に仕えた。しかし彼等ももっと嫌いになり、時には自分の怒りをコントロールすることができなくなった。私は怒りっぽくなり、嘘をつくようになった。すでに自分自身ではなくなっていた。習慣になったように、私の口は自然にいつも嘘をついた。<sup>(註26)</sup>

とうとう「私」の精神や肉体は壮絶な苦しみの中へと落ち込んで行く。そうすると、激しく

怒ったり頻繁に平気で嘘をつくようになる。そうすれば、誰も相手にしなくなっていく。誰も相手にしなければますます激しく怒り、以前よりもっと頻繁に嘘をつくことになっていく。悪循環である。この循環には救いはない。すでについては私娼もできない段階が目の前にある。

「私」という女性は「好ましい」性格の人物である。だのに何故、作者はそのような「私」に「悪い」ことを行わせるのだろうか。

すでに前節で述べたように、作者は「好ましい」性格の持ち主が「好ましい」ことをすることで、却って悲惨なところに落ち込んでゆく展開の方法を採っている。この展開を再三繰り返すことで、もう既に読者から充分なる「同情」を引き出している。だから、その時点で、たとえ「私」が悪いことをしても決して「私」のせいではないと答える素地はできあがっている。

その上で、さらに実際に読者の目の前で登場人物に「悪い」ことをさせるのである。こうすることで読者に、従来「悪い」とされていることが、果たして本当に「悪い」ことなのかという問を何度も発し、疑問を抱かせ、従来とは違った視点を持たせようとしているように思われるのである。

この結果、読者は、この作品を読むことで、現実の世界でも、現在目の前にいる「悪い」ことをしている人物に対しても、もともと「悪い」人物ではない、という見方ができるようになっていくのかもしれない。少なくとも現実の世界にいる「私」や「私」の母親のような者に対しては決して単純に「悪い」人物という見方はしなくなっているはずである。

こういう作者の意図があることは、作品の中で登場人物の口を借りてしばしば「私が悪いのではない」<sup>(注27)</sup>と述べさせていることから窺うことができよう。

## おわりに

老舎がこの『月牙児』をどのように作りあ

げているのか、そしてそこから、老舎の創作意図を考えてみた。いくらか主観的にならざるを得なかったが、少しはこの点が明らかになったのではないか。特に今回の分析によって明らかにしたストーリーの展開の仕方は、老舎文学を理解する上で、重要であると考えている。この展開に、老舎という作家の、社会や人間に対する根本認識のようなものさえ見出すことができると考えるからである。

それは、老舎に、もし社会に何か問題があるとすれば、問題の深刻さに最も敏感に反応し、もろに影響を受けるのは、社会の中でも最も弱い立場の、とりわけその中でも最も「好ましい」性格を持った人である、という認識があることである。実はこの認識の上に老舎の『月牙児』の世界はできあがっていたのである。

だから逆に、社会の中でも弱い立場の、極めて「好ましい」性格を持った人物を社会の中で生かしてみれば、その社会がどのような社会であり、もし社会に欠陥があるとすれば、社会にどのような欠陥があるかがはっきり分かる、という発想も可能になる。この発想に依れば、創作は、いろんな職業の人のできるようになる。この『月牙児』では、それが「私」という人物であり、「私」の母親だったのである。そして、この発想から、さらに車引きを主人公にしている『駱駝祥子』のような作品が生まれ出て来ることは十分に考えられる。

以後『微神』との比較、或いは『駱駝祥子』との比較を行えば、この『月牙児』で行っていることがもっとはっきりしてくるのかもしれない。今後の課題にしたい。(完)

## 【注】

テキストとしては『老舎全集8』（人民文学出版社）の中に収められているものを使った。したがってこの論文の『月牙児』のページはこの本のものである。『月牙児』という作品は短篇集『桜花集』、小説集『老舎選集』（開明書店）、中短編小説集『月牙集』、『老舎短篇小説選』、短篇小説集『月牙児』、『老舎選集第2巻』（四

川人民出版社)にも入っているし、また手に入りやすい『老舎文集 8』(人民文学出版社)でも読むことができる。因みに『全集』は p. 260 から始まり、『文集』は p. 263 から始まっている。

この作品の訳本としては『老舎小説全集 6 卷』(学研)に竹中伸氏のものが掲載されている。

- (1) 『八戸工業大学紀要第 19 卷』 pp. 169-181 に掲載した。
- (2) 『微神』は雑誌「文学」の第 1 巻第 4 期(1933 年 10 月 1 日)に発表され、後に 1934 年 9 月出版の短編集『趕集』(良友図書公司)に収められた。一方『月牙兒』は「国聞周報」の 12 巻 12・13・14 期(1935 年 4 月 1 日, 8 日, 15 日)に発表され、後に 1935 年 9 月に発行された短篇集『桜花集』(人間書屋)に収められた。
- (3) 『八戸工業大学紀要第 19 卷』 pp. 169
- (4) 『老舎事典』(大修館書店) p. 128
- (5) この作品が入っている短篇集『桜花集』は何度も再版されているし、後にこの作品の名前を採った『月牙集』(晨光出版社・1948 年)『月牙兒』(人民文学出版社・1959 年)という短篇集が出たり、その後短篇集、小説集にもことごとく収められていることからこの作品の好評ぶりが窺える。
- (6) 『月牙兒』 p. 283
- (7) 同上 p. 284
- (8) 同上 p. 283-284
- (9) この点に関して「我怎麼写《短篇小说》」(『老舎全集 16』・『老牛破軍』)によると以下のようなになるだろう。この『月牙兒』はもともと『大明湖』という長篇小説の一部分であった。この『大明湖』が焼けてしまった(1932 年の上海事変で商務印書館が爆破されたときに……筆者注)あとでも、この一段だけが忘れられなくて、この一段を作品化した。これが『月牙兒』ということになる。つまり、もと長篇小説だったということとこの作品の体裁といくらか関係があるかもしれない。
- (10) 「我怎麼写《短篇小说》」(『老舎全集 16』・『老牛破軍』)によると、老舎は短篇小説を大きく三つに分類しており、長篇の材料を使った作品とし

て『月牙兒』『陽光』『断魂槍』『新時代的旧悲劇』の四つを挙げている。この中で『陽光』の体裁はこの『月牙兒』と全く同じである。このことから考えるに、老舎の新しい試みの一つと考えた方がよいと思ってる。

- (11) この点関しては「⑤以“我”叙“他(她)”和以“我”叙“我”」(『老舎的芸術世界』・孫鈞政・北京十月文芸出版社・1992・9)というものもある。
- (12) 『月牙兒』 p. 268
- (13) 同上 p. 266
- (14) 同上 p. 266
- (15) 同上 p. 266
- (16) この場面の竹中氏の注に「中国では官庁でも学校でもその長が代わると、職員はもちろん、用務員、門番に至るまで全部代わる習慣である。」とある。(「三日月」『老舎小説全集 6 卷』p. 39・学研) 竹中氏は戦前の北京に長く住んでおられたこともあり、参考になる。
- (17) 『月牙兒』 p. 272
- (18) 同上 p. 274-275
- (19) この場面の竹中氏の注に「当時北京には工場などはあまりなく、デパートの店員やレストランの給仕も全部男であり、女の職場は今のようにはなかった。本文二八頁に出ている女給の場末の飲食店は例外中の例外である。」とある。(「三日月」『老舎小説全集 6 卷』 p. 39・学研)
- (20) 同上 p. 275
- (21) 『月牙兒』 p. 276
- (22) 同上 p. 277
- (23) 同上 p. 277
- (24) 同上 p. 281
- (25) 同上 p. 283
- (26) 同上 p. 284
- (27) 例えば、注(24)の文章にもあるし、P. 285 1.3 にもある。

(付記) 本稿は科学研究費補助金(基盤研究(C))「中国における家族の文学表象の形成と展開に関する基礎的研究」代表者西上勝)による研究成果の一部である。